〈那須通信6〉

回　帰

加藤文子

展覧会が終わり、搬出の片づけもひと通り済んだ。盆栽の仕事を再開したいのだが、庭に出て植物と対しても、うまく焦点が合わない。いつもなら水やりなどしていると、当たり前に気づけるはずの種々の事柄が、目に入って来ない。何をしたら良いのだろう。仕事が、見つからないのだ。

無理に仕事に向かわせようとする自分がいて、庭をウロウロするものの、心がついて来ない。どうも感覚が違う。

普段めったに人と会うことのない生活から、展覧会を迎えて、短い時間の中で大勢の方とお話ししたことが、原因と考えられる。特別むずかしい会話をしたわけでもないのに、波立つ心が収まらない。

こんなもどかしいような調子が、三日ほど続いた。四日目のこと、朝から久々雨が降っていた。水やりは休み、ゆっくり過ごそうと心を緩めたとたん、来週に控えた「植物のお話し会」のことを思い出した。幾鉢か盆栽を持参して、ご覧いただくことになっている。解説など当日の内容を組み立てるには、まず盆栽を選ばなければならない。

こんな雨模様では突然の来客もなさそうだし、落ち着いて作業をすすめることができそ

うだ。今日の雨は、仕事をさせてくれるために舞い降りたサポーターのように感じる。雨に包まれ、守られているような安心した気持ちになる。

どんな盆栽を持っていったら良いのかしら、小さな鉢、中くらいの鉢、実の成る木等、選び出しながら庭をめぐる。めぐるうちに、まるでベールが取り除かれるように、仕事が見えてくるのだった。

棚上に細かな虫の糞を発見、隣接する盆栽が虫にやられている証拠である。季節の変化に合わせて、置き場を変える必要のあるもの、カイガラ虫が付着した幹や枝、次々にするべきことが現れる。

鋏を使う、ピンセットを使う、ブラシで幹を洗う。棚も洗う。手足が自然に動く。しかも、ちっとも疲れない。心と体が、ようやく繋がったようだ。

夕方には、「お話し会」の準備も整っていた。